



写真29 便所1・2(北から)



写真30 便所1・2(西から)



写真31 溝5(土管)・6(豊島石製U字溝)(東から)



写真32 溝5(土管)・6(豊島石製U字溝)接続部(北から)



写真33 溝5土管接続部の補修状況(北から)

関係から推測して手水処の排水用のためのものと考えられる。土管の接続部に破損した箇所は丸瓦や漆喰で補修されている。溝5は東西に走る豊島石製U字溝(溝6)に接続する。

調査区の北東寄り表土直下に、約3m×約1mの範囲にタタキ面が認められた(第38図)。タタキ



写真34 魚だまり1(北から)



写真35 魚だまり1の埋塞

面はほぼ平らであるが、南端面など一部周囲が上方に屈曲している箇所もある。

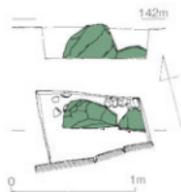
平坦面には、径20cm、深さ25cmの堑が埋められていた。この堑は「魚だまり」になるものと考えられる。再建後の絵図によると、当該箇所は「御庭」と記されていることからこの考え方を補強するものであろう。



第38図 魚だまり1 平面・断面図 (S=1:40)

#### T-4 (第39図)

備中櫓埋没石垣の西側延長を確認するために設定した。前述したように、埋没石垣の西側は五番門南石垣の下に入り込んでいることまでは確認したが、そこから先は確認できていなかった。そのため、五番門西側通路部分を精査した結果、石垣の延長線上の位置に僅かに表面がのぞいている石が認められた。この石を中心にトレンチを設定した。果たして、2石を確認することができた。南側の石垣面になる方は平坦であり、北側の裏手になる部分には栗石が用いられている。



第39図 T-4平面・断面図 (S=1:80)

#### 出土遺物

T-1土壌1 ゴミ穴と思われ、雑多な遺物が出土している。碗類が最も多く、粉々に砕けているものの、数十個体分が出土している(写真38)。また碗の破片(写真39)は完全な形をとどめている個体はほとんど無く、いずれも陸の部分が大きく凹んでいたり割れたりしたために廃棄されたものと思われる。



写真37 五番門西側の埋没石垣(西から)



写真38 T-1土壌1出土遺物1



写真39 T-1土壌1出土遺物2

備中槽周辺 主に瓦類が出土している。これらの瓦類は後述する復元整備工事の参考資料としたものである。写真40は軒丸瓦である。径15.2cm、左三巴文で珠文は13個である。写真41は軒平瓦で中心飾りは三巴で左半分が欠けているが、右側には唐草文が三転する。瓦当面の高さは3.8cmである。写真42は棟込瓦である。直径10cm、厚さは2.1cmでいずれも揚羽蝶文であり、同范品のようである。現在までのところ備中槽周辺でのみ出土しており、おそらくは備中槽にのみ使用された棟込瓦であると思われる。ただし、文様自体は「揚羽蝶」と認定するにはかなり退化した文様であり、羽が3枚で明確な胴体は確認できず、頭部も線での表現に止まっている。また、脚や触角状の表現も判然としない。

その他 写真43は魚だまり1に埋められていた甕である。写真44はT-1周辺で出土した貝類である。カキ・アカガイ・シジミ・サザエなどである。いずれも食後にゴミとして捨てられたものである。



写真40 備中槽周辺出土軒丸瓦



写真41 備中槽周辺出土軒平瓦



写真42 備中槽周辺出土棟込(菊丸)瓦



写真43 魚だまり1 甕



写真44 出土貝類

#### 4. 第3次調査（平成11年度）

T-1・2（第40図、写真46～54）

五番門南石垣は変形が著しく、津山城跡の中では最も崩壊の危険性の高い石垣であった。また、備中槽復元整備工事にあっても修復する必要があることから、事前の調査が求められていた。併せて、備中槽内部の旧石垣が五番門西側通路部に延長していることから、この石垣を追求するためにも設定した。

五番門南石垣の調査前の状況は、西側部分においては約4mの高さの内2m程度が埋没している状況であった。石垣も雁木南側石垣を中心に、失われている箇所も認められた。

調査は西側部分の土砂を取り除くことから開始した。その結果、雁木の最下段（石段1）だけが唯一遺存していることが確認された。また、雁木西側の北張り出し石垣の北に隣接して、石垣の根石と考えられる石を3石確認した。これは北張り出し石垣の設計変更に伴うものと考えられる。

北張り出し石垣西端に沿って南北ラインに石垣（埋没石垣2）が発出された。T-1調査区で約6mを確認した。その北は、石垣ライトアップ設備があるため、約2m間隔をあけてT-2を設定した。ライトアップ設備の下を貫通させてT-2と結合させた結果、石垣の総延長は約8mに及ぶことが確



写真45 全景（空中撮影）



写真46 調査前（北から）



写真47 調査後（北から）



写真48 石段1（北から）



写真49 埋没石垣2・3（南西から）



第40図 T-1・2平面・立面図 (S=1:80)

認められた。石垣の北端部分は、非常に固くタタキ締められており、スコップも入らない位の固さがある。これは天守台石垣を築く際の地業と考えられる。

この石垣の南から約6m北へ行った所、即ちT-1北側拡張区において西方向に延びる石垣(埋没石垣3)を確認した。この石垣は、後述するが第6次調査T-4で確認された出隅石垣に接続するものと考えられる。そして、3時期ある津山城石垣の時期の2時期目に相当するものである。



写真 50 埋没石垣 1 (南西から)



写真 51 埋没石垣 1 西面 (西から)

雁木(石段 1) 中央の北側通路中央部において、備中櫓内部から延びた埋没石垣の出隅(埋没石垣 1)を確認した。確認した範囲は、東西 1.4 m、南北 2.3 m、高さ 1.3 m を測る。現状では石垣に矢穴の痕跡は見られない。埋没石垣 1 は、3 時期ある津山城石垣の最初の時期に相当するものである。

埋没石垣 2 に重複して南北方向に 2 石(石段 2)が検出された。2 石の南北長は 2 m を測る。この石段は、西方向に連なる多門櫓入口の踏み段と考えられる。

### T-3

T-1 石垣 1 の北側延長を確認するために設定したが、この場所には延びていないことが判明した。



写真 52 .調査前(北から)



写真 53 石段 2 (東から)



写真 54 石段 2・埋没石垣 2 (南から)

T-4 (第41・42図、写真55～61)

通常、本丸御殿は表向きの御殿と奥向きの御殿に分けられる。津山城の場合は、御殿の東側部分が表向き、西側部分が奥向きにということになる。さらに、表向きの御殿は南から広間、大書院、小書院という構成になっている。本調査区は大書院の北東角（入側）を把握するために設定した。本丸御殿は、文化6年（1809）の火災前後の2時期があることが分かっている。以下、火災前後に分けて記す。

火災前の遺構

調査区の北西部で、平面長方形の石組遺構を検出した（水溜1）。遺構確認面での計測値は長辺39m、短辺23mである。深さは1.6mを測る。南東角に東西1.5m、南北75cmを測る4段の石段が付く（第42図）。この石組は、絵図に記載のある「水溜メ」に相当する。内部からは大量の瓦が投げ込まれた状態で出土した。その中には赤く焼けたものも多く含まれていた。恐らく火災で焼けた瓦を廃棄したものと思われる。



写真55 T-4・5・6全景（空中撮影）

水溜1に平行して径約1m前後の柱穴が、心々距離約2m間隔で東西方向に一直線に並んでいた（堀1）。これは大書院北側の土塀に相当するものである。第41図右上に図示したように、柱穴内からは1ないし3個の扁平な石が重複した状態で出土した。また、柱穴自体にも1ないし3回程度の切り合いが認め



写真56 全景（空中撮影）



写真57 全景（東から）



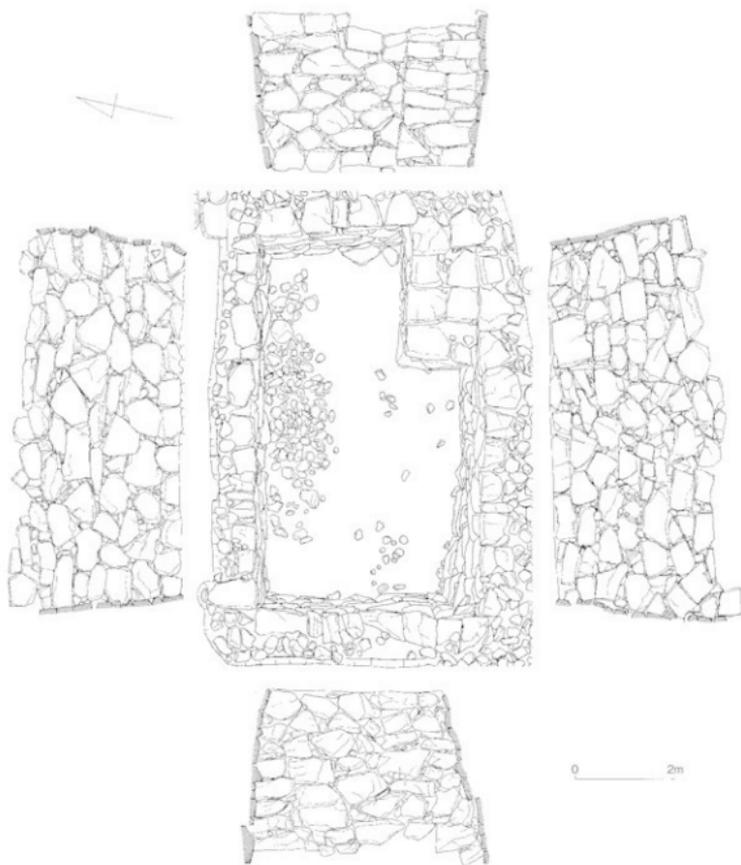
写真58 水溜1（西から）



写真59 水溜1（北から）



第41図 T-4平面・断面図 (S=1:80)



第42図 T-4「水溜」平面・立面図 (S=1:50)

られた。これらのことから、数回の土塀の改築があったことが窺える。

この塀1に平行して、6・70cm北側には1つ置きに少し小さめの柱穴が検出された。これは塀の控柱に相当するものである。このことから、塀1は南側即ち大書院側が表で北側が裏向きになることが分かる。さらに絵図には、塀1から北方向に延びる塀が描かれている。これについても、塀1よりは小ぶりではあるが、絵図どおりの位置に柱穴が検出された(塀2)。塀1同様、柱穴には扁平な石が複数据えられていた。この部分も改築されたことが分かる。

塀1の南側に隣接平行して幅1.5m前後の浅い溝が確認された(溝1)。溝1の東端には、幅1m弱の溝が南方向に2箇所直角に取り付く(溝2・3)。また、溝1の南北両壁面には、切り合いを示す屈曲部